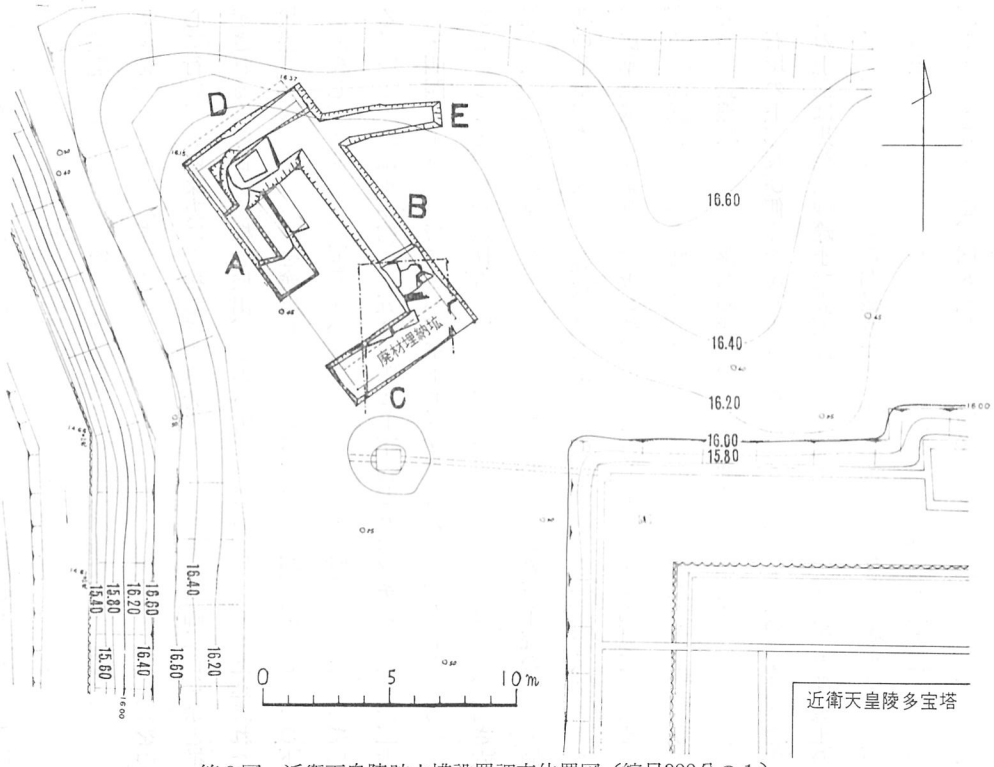

第３図　近衛天皇陵貯水槽設置調査位置図（縮尺300分の１）

ヘトレンチＥを延長した。この附近は地下一・二メートル附近に地下水面があるので、Ｄの西端中央一メートル四方を排水のため深さ約二・六メートルまで掘さげ、他は深さ一・七～一・八メートルまで掘下げた。この区域は地下約一・一～一・二メートル（標高一四・八〇メートル前後）までは盛土で下から黄褐色粘質土・黄褐色壌土・褐色土・黒褐色土・表土の五層になり、瓦片・陶器片・かわらけ（第19図）などを包含する。盛土下は、Ａ及びＥの各西端附近を両側とし、そこからＢを斜めに縦断して舌状に南に突出する黒灰色のヘドロ堆積の粘質土層があり、木片・木の実、漆器片等を含み、層の厚さはＤ中央部が厚く、東西両側が薄く、東西の幅約四メートル。もとは溝又は池と考えられ、これを黄褐色粘質土で埋立てたものと考えられる。このヘドロ堆積層の下層は青灰色細砂層、その下には、鉄銷で凝結した赤褐色の薄い砂礫層があり、その下方は砂礫層、礫層と続く、礫層の下は粘性細砂層のようで、ボーリング棒を入れると、激しく砂を吹上げる。礫層には摩滅した須恵器・土師器の破片を含むので、古い河床堆積層と考えられる。

出土物については、整理中で検討していないが、陶器は大略近世の国産品、瓦は布目瓦のうちに、釉薬のかかった灰白色のものが多数ある。

（石田茂輔）

五　景行天皇陵墳丘前方部裾の護岸

昭和四九年一月から三月の間に、景行天皇陵の前方部の一〇号堀・一

号堀・二号堀に面する墳丘裾の護岸工事を実施した。この護岸工事は、昭和四六年一二月に実施したこの区域のトレンチ発掘事前調査の所見に依って、地下の遺構及び遺物包含層の損傷を最少限に止めて墳丘裾の保護を計る書陵部の基本構想に基づいて京都事務所工務課が計設施工した。以下事前調査及び護岸工法の概要を記す。

事前調査は六九頁第1図のように八箇所のトレンチを設定、関西大学考古学教室の協力を得て発掘調査を実施した。一〇号堀の一号トレンチでは、墳丘裾水涯線附近の地下二〇センチの所で、池又は水路の護岸と認められる近世の物と推測される二〇～三〇センチ前後の自然石による石積と杭打ちを検出し、旧堀底はこの下方地下約九〇センチの深さで、現墳丘の下まで続いていることを確認、一号堀の三号トレンチでは、水涯線の部分で、近世のものと推定される一本胴木に花崗岩間知石を積んだ石垣の残痕を検出し、その内側の墳丘テラスは近世の陶器片を含む盛土で、テラスの奥二段目の立上り近くに、二〇～三〇センチの礫による葺石面が埋没していることを確認した。一号堀の前面墳丘水涯線の部分には数年前まで、埴輪列の残痕が存したが、完全に崩落して痕跡を留めず、三号トレンチでは、墳丘水涯線上部は、陶器片を含んだ粘性土で補塡してあることが判明した。又その直下部には幅約三〇センチ程の墳丘に平行した溝状の間隙部分を検出、間隙の内部には陶器片、土師器片等を包含した砂があった。この溝状遺構に接する堀側には、一メートル幅で墳丘に沿って走る、栗石と粘土をつき固めた部分があり、その更に堀側に少し離れて同様な構造物があった。いずれも朝和層（この附近に多く見られる洪積期の地層）を段状に切込んだ上に設けられており、堀の内側のものの方が、天端が低い、堀水の水位の変化に応じた波よけとして作られた物かも知れない。五号トレンチでは、四号トレンチと同様な、栗石と粘土をつき固めた部分があったが、その中に、二本の胴木丸太が入って居り、その下方に、原初の葺石と思われる人頭大の自然石が、積み重なって、勾配をもった石組があった。

六号トレンチでは、水涯線直下から堀側にかけて、ヘドロ層の下に、方四〇～五〇センチ内外の礫による、葺石の根石又は石積みと見られる石組が存在し、その末端の堀側に円弧状に数個の人頭大の礫が存在した。この円弧状に配列した石は、落石か、人意的なものか、判然としないが、内部に粗粒の白砂があり、その中から、別項で紹介した弥生式土器や古式土師器とみられる土器片が多数出土した。粗粒の白砂は石組の下半の各くびれにも貯留し、又石組堀側の堀底全面にも薄い層をなし、その下方には暗灰色の砂層があり、堀底の壺掘によれば、更にその下方には朝和層と思われる層があった。暗灰色砂層と粗粒白砂層の間で、トレンチ堀底全域に土器片が散在し、この層は、現外堤下に続くように認められた。

二号堀に面する墳丘下段は、江戸時代阿弥陀堂のあった所で、墳丘裾には明確な構築時期は不明だが古い礫積と割石積の石積護岸が設けられている、七号トレンチでは、落石と、石積基部の粘土張しか認められな